

- *そして、さらに多くの人々が、イエスのことばによって信じた。そして彼らはその女に言った。「もう私たちは、あなたが話したことによって信じているのではありません。自分で聞いて、この方がほんとうに世の救い主だと知っているのです。」(ヨハネ4:41~42) サマリヤの人々は、その女から、イエスは預言者に違いないと聞いてイエスを信じたのだが、その時はまだ確信はなかった。しかし、イエスから直接話を聞いた時、はっきりとイエスが「世の救い主」であることを確信したのである。イエスのことばはそれほど真実と力があつたのである。
- *イエスがその後、ガリラヤのカナにおられた時、カペナウムという町から王室の役人が来て、息子が死にそうなので何とか助けて欲しいと願った。しかし、イエスの答えは、「あなたがたは、しるしと不思議を見ないかぎり、決して信じない。」(4:48)であった。ほとんどのユダヤ人は何かの奇跡をこの目で見ることを求めていた。あなたも、ただ病気を治して欲しいだけなのではないか、本当に私が救い主であることを信じているのか、と問い正された。しかし、役人は必死にくいさがる。イエスは、彼の、あきらめない姿と霊的な可能性を見抜かれたのであろう。「帰って行きなさい。あなたの息子は直っています。その人はイエスが言われたことばを信じて、帰途についた。」(4:50) イエスが息子の所に来て癒してくださることを期待していた。しかし、半信半疑であつたかもしれないが、「直っています」というイエスのことばを信じ、帰りなさいということばに従つた。イエスのことばをいただいた時刻と同じ時刻に息子の熱がひいたことを知らされた。「そして彼自身と彼の家の者がみな信じた。」(4:53) 彼と家族は、「ことばを聞いて」信じるきっかけを与えられ、「しるしを見て」信じたのである。
- *私たちは、最初イエスのことばにふれてすぐに信じることはほとんどないだろう。しかし、イエスが私にされた不思議なわざを知つた時、初めて信仰の確信が与えられるのではないか。その意味では、皆「見て信じる」者である。そして、信じる者となつてからは、「イエスのことば」に理解が進み、重みが増して来る。神のことば、イエスのことばには悪意は一つもない。どんなことばでも善意である。それは、愛から出ているからである。イエスのことばの力に頼り、愛のことばに恵まれながらイエスに仕えていきたい。